事情 村井靜馬編輯

明治太平記

廿三編 下

特32
562
大日本教育會書籍館
四五函 三架 二七號 四八册

明治太平記廿三編巻之二

東京　村井静馬著

却説賊兵の山を下るや其道筋一轉して濱子を出づ第一旅團の兵若干なり擊て出る賊兵二たび轉ドて祝子川より出づ第一旅團の川崎少佐い一大隊を以て祝子上流なる獅子川の方面を守る江の嶽の山と聞き三中隊を率ひて赴き援ふとなる賊

東京都立中央図書館蔵書

兵い森林の間と経て背後より祝子川より出る或
以て我ゞ兵の一中隊後より堀川峠より進むもの
忽然として敵に遇ひ戦ふ而して我兵の
現員四五十人に過ぎず遂に支ふること能はず
して退いく祝子川越の険を守る時に廿日午前
第五時なり賊兵祝子川に入る思ふに夫の三中
隊い急に赴きしゞ少なに反りて敵に逢ぎ愈々
寡なる兵として必至の勁兵に當り遂に第二線
を失いしめたり初め賊兵ゞ江の嶽山を出るに
當り長井の賊営既に我ゞ有に帰し賊巣全く拔
く而して賊魁い逸しを見ず西郷桐野以下指
を屈するの賊將一人として有ることなし賊徒脱
出るの前日各隊に令して曰く中夜を以て長
井村の本営に會せよと既にして賊の校將期と
徳さゞ本営に至べ聞として人なし蓋し賊の
機変に富めるおと獨り官軍の不意に出るのを

よりて亦賊徒の不意より出づ是より於て遺るゝ
ものの大将を失ひ策の施すべきなし始めて
賊将の機智より誤らるゝを知る者なり然れども
悔て及ばず其未だ頑迷なして覚らざるものと
雖ども奈何ともなるなし遂に出て縛に就
くものの殆んど萬数なり我が降虜を監するも亦
多数を要せざるまゝ故に暫く一海島に
放ちて其沿海を警備をとらふ賊魁已に逸して
出没図り難きを以て各旅團の兵追躡するもの
なり警備するものなり第一第二旅團別働第二
旅團の若干兵に賊を逐ひ別働第一旅團に肥後
の海に廻り矢部街道に進み谷少將に熊本鎮臺
より赴き第四旅團に豊後に至りて佐伯府内を守
り進んで賊の衝撃に備ふ二十日午後賊魁の逸
するものの路を中村へ野に取りて三田井街道
に突進せ賊途に要所に遇ふまゝに必らず

兵を留めて追躡を拒ぐ我軍三田井の急なるを思ひ進擊兵の一隊別働第二游擊隊高島少佐を昼夜兼行して三田井に入る二十一日黎明賊の前軍岩戸を発して三田井に進入せ游擊隊邀へ戰うて利なく賊兵遂に三田井に入る糧米數千俵官金數千円を奪ふ蓋し第一旅團の貯ふる所にして延岡に運輸せざる者なり賊の至る処民に奪ひ食はしめ以て糧米用ゐる処なし

此時民に鬻ぐ米一俵の價ひ金五錢に定むと雖も賊兵の第一旅團の築く所の胸壁に拠て守る此日別働第二河野少佐二中隊第一旅團長谷川中佐三中隊新町より三田井に向ふ我が兵進んで簑戸峠に至る賊の後軍險を占め断崖に拠て防ぐ此峠や三田井前面の一高峯にして嶮巖巨石屏を一條の径を通じ恰も石門に入り隧道を行ぐごとし一山の脊に岩戸川の急湍なり

川の向ひ岸三田井より低き断崖百三四十丈より低きその四五十丈の地に拠る此の如きの天険に倚て踰やすく我が軍まくに頓を野津少将進んで曾木の営に至り又新町に移る此日突出の賊東郷某等二十三人降伏せり其言ふ処に因べ精兵五百人工人給養人夫二百人なり其他一千の兵を長柄村に残し突出の後その隙を窺ひ延岡を衝くの策なりと此兵もまた降伏を

二十二日第一旅団大島少佐二中隊を以て至る三田井の守り固き故以て兵を分つて宮水より迂回し竹の迫に出て三田井の背後を襲ふ時に賊の前軍已に去り中軍の三田井に為るもの旦戦ひ旦卻き後軍来りて僅に食に就くもの忽ち我が兵の破る所となる三田井の地四達して之を以て馬見原道なり豊後竹田道なり人吉街道熊本本道なり賊遂に馬見原を指て走る

箒戸峠より三田井を臨む図

より先き警報已に達せ守る者多く篝火を点ド
て疑兵を張る既にして熊本鎮臺樺山中佐若干
兵を率ゐて至る賊兵馬見原に拠るあと能ち
我が追撃の兵亦漸く加らんとす賊遂に道を左
翼の山間に取り坂本を経て七ツ山を指て走る
長谷川中佐ハ馬見原に進む高島少佐ハ人吉に
向ひ大島少佐を坂本より賊を尾撃せ別働第二
旅團の要逆兵ハ七ツ山を扼しくあまを拒む賊
兵まづ山間より神門に出づ神門を米良山脈に
して細島の西十里にあり賊軍将に細島の海岸
に突き出んとするが如し二十三日岩戸の賊路
を下野村に取て去るとゝ雨戸峠に拒ぐもの
昨日岩戸において長谷川中佐と戦ひ竹の迫敗
る旅以て路を轉じてあに出づ二十四日別
働第二旅團の要邀兵一軍ハ既に小崎にあり
人吉街道を扼し一軍ハ方に神門に出づ而して

先ず馬見原に向へる長谷川中佐四中隊を以て賊の進む路を遮ぎらんが為め遠りて胡麻山に出づ賊兵果して神門に走る我が兵あと追へ打つ翌暁に至りて大の賊兵と敗る二十五日賊鬼神野に退く我已に小崎江代を扼さる以て神門鬼神野の間に躊躇せんとす賊兵松浦少佐の兵と戦て敗を六轉して山道を左に折れ渡川を経て銀鏡に入る時に我兵数日の大風雨に遇ふて糧食継りず川の流暴漲して路を塞ぎ冥霧四山を鎖して追撃意の如くならざるを以て屢々進むべき路に苦むを而して賊を我兵の所に避けて其無き所に出るを以て一定の方向なく糧を民に奪ふを以て運輸の労多し加へて慣たる疾足とり川を家山に奔走を其屢々逸して遂に鹿児島に入らしむるものへ蓋し決して戦ひの罪にあらざるなり二十六日賊遂に小河

先ず馬見原に向へる長谷川中佐四中隊を以て賊の進む路を遮らゞ為め遠りて胡麻山に出づ賊兵果して神門に走る我が兵あまた後邊へ打つ翌暁に至りて大ひに賊兵を敗る二十五日賊鬼神野に退く我れの已に小崎江代を扼する後以て神門鬼神野の間に躊躇せゞ賊兵松浦少佐の兵と戦ひて敗れ六轉して山道を左に折れ渡川を経て銀鏡に入る時に我兵数日の大風雨に遇ふて糧食継うぞ川の流れ暴漲して路を塞ぎ冥霧四山を鎖し追撃意の如くならざる後以て屢々進むべき路に苦むして賊を我兵の所と避けて其無き所に出る後以て一定の方向なく糧を民に奪ふ後以て運輸の労を加へ慣たる疾足を以て家山に奔走し其屢々逸して遂に鹿兒島に入らしむるものへ蓋し決して戦ひの罪にあらざるなり二十六日賊遂に小河

に入る其屢々轉折して茲に至るに方り賊の志を所に我が皆後なる高鍋或る佐土原地方に出んとする乎人吉に出んとする乎將た左右翼の中央に出んとする乎一も知るべからず只夫れ賊は環内なり官軍は環外なり恰も游星の相逐ふが如し彼れは聚散出没觸るゝ所に蠲れ行く所に行く官軍配兵のかゝる所あと云ふ所こゝに然れども大体の部署は已に定まる別働第二旅團中村中佐第一旅團長谷川中佐の兵と共に人吉を守る一軍は米良に向ひ第三旅團及び新選旅團を米良より高鍋佐土原に出る要衝の諸所を扼し漸く野尻地方に進む別働第一旅團は曩に已に海路より熊本海岸に廻りしを以て漸次に左翼に轉じ熊本鎮臺に進む第二旅團は海路より加治木に上り吉田地方に進まん

二十八日　夜賊兵飯野に宿せり先き三

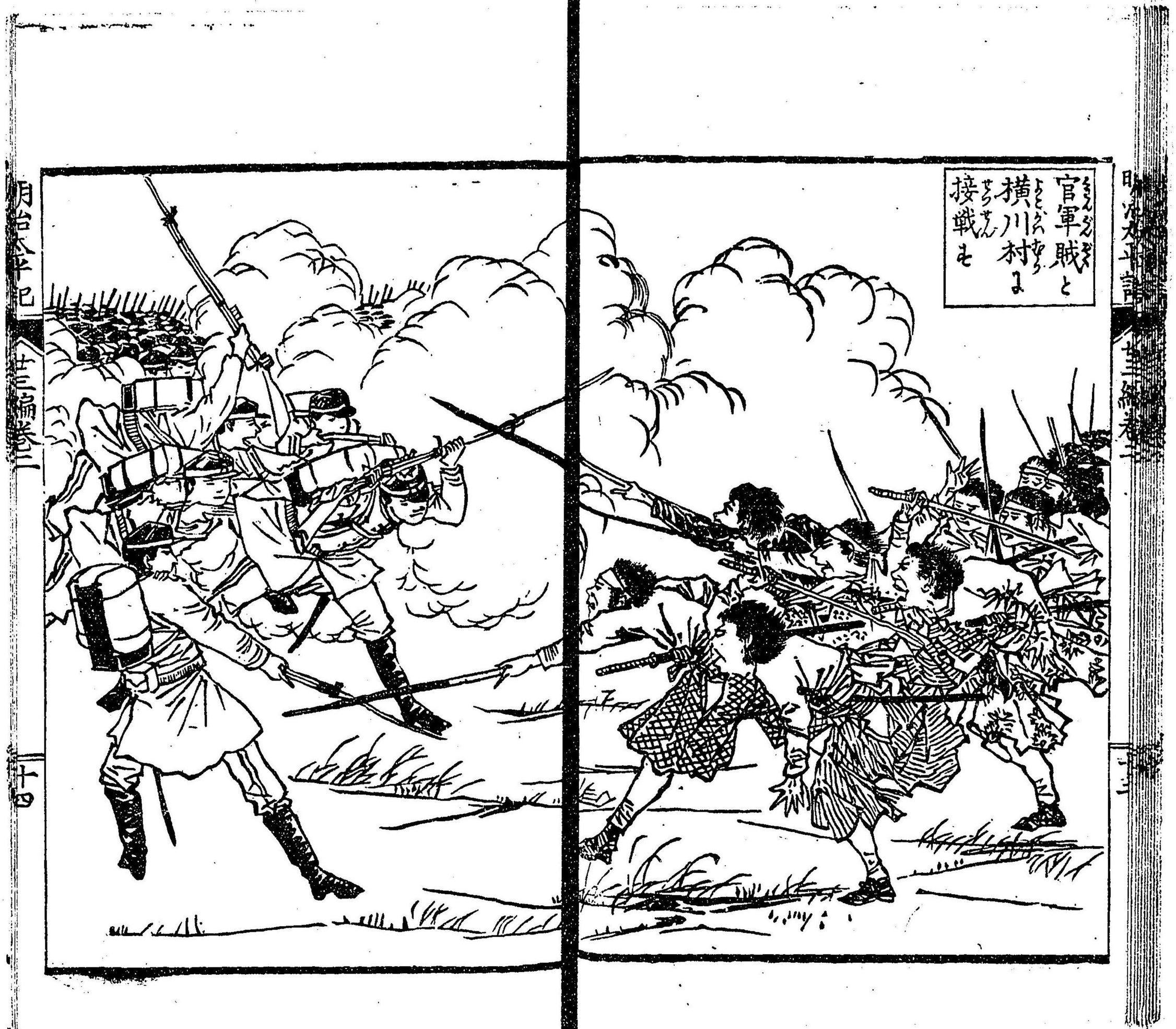
三好少將の艦波濤を経て鹿児島湾に至る

好少將へ第二旅團の兵を提て將に鹿児島に發
航せ會々風雨暴うして海上波荒くして船進
まず漸々二日を経て此日鹿児島湾に入港せ同
夜十二時重富より上り中軍を重富に置き阿武
中佐の率る所の右翼軍を帖佐に置き斥候隊一
部を加治木に出せ二十九日野崎中佐の率る所
の左翼軍踵でいさる因て中軍及び左翼軍を加
治木に移し右翼軍を溝邊に移し其加治木の斥
候兵を踊に出さしむ時に賊既に栗野に出るの
報あり阿武中佐踊の斥候兵を溝邊に合せ因て
左翼軍の二中隊を踊に分ち遣へし加治木國府
を隠蔽せしむ三十日拂曉賊小林に拠り栗野を
襲ひ兵を分つて横川庄内に出て鹿児島に衝き
入らんとせし時に阿武中佐の溝邊にいさるや拂
曉栗野の方位に斥候を出し賊の將に横川に入
らんとせし知り即ち兵を進めて長谷川中佐

の先鋒隊と會一第四時あると横川村外より開戰
を賊兵凡そ四五百名正面の突擊勢ひ最も急る
り官軍よく防ぎ銃鎗と以て突き進むと二田より
及ぶ賊もまた敢て屈せず我が左右より迂田を我
が兵僅らに四中隊のみ衆寡うたらひ敵しがた
く遂に第一線を保つあと能はずして退いく第
二線に拠りて戰ふ此役や我軍の戰ひに死する
者士官以下十三名下士以下廿七名傷く者なり

午後第四時川村少佐人吉道より至るを以て薄
弱の部を補綴し且つ兵を分つて賊兵の右翼に
迂回し同時に全線の兵を以て前面より齊しく
進むの策とるを會々迂田兵いまだ達せざるに
日西山に沒を因て更に前の策を明朝に期を此
日午後二時賊の一軍踊て襲ふ俘にする所の賊
の言に因るに初め賊の小林に出るや兵を二道
に分ち一軍は西郷隆盛に從つて進み一軍は

都の城を衝んとて村田新八を率ひ其踊る出たる一軍へ即ち村田新八の率る所よりして都の城を衝くの手術行へざると思ひ道を轉じくまなく出るとりん踊る至るの官軍未だ守線を張るに及ぶしく賊俄かに至る因て數十歩を退き更に隊を整へくく之を邀へ激戦を遂に銃鎗を以て突進をなし撃て去る紙部く已にして日暮る因て戦を收む蓋し官軍の早く進んで真幸街道の狭隘の要所に邀ふるを得るを恐れ頗る遺憾なりと雖ども賊も横川に向て官軍に會せんとて寔に意外に出しものく如し曩に城中に陷り間を得て脱し帰りし我が軍医石坂某云ふ西郷等が官軍の溝邊に出る紙聞くや一旦狼狽して山間に退くこと數十町なりしと聞きしより先に横川の警報なるや三好少將の野津大佐として中軍の兵二中隊を分ち溝辺に


官軍賊と
横川村ま
接戦も

出て應援せーむ野津大佐一中隊を分けて急ぎ横川に赴らーむ因て加治木より別に一中隊を遣はし既にして横川に旅する所の一中隊至れば則ち戰ひ已に収る能はず以て溝辺に還る已にして三好少將は踊の急を思ひ溝邊の兵を分けて赴き援はんとす然れども未だ発せざる三十一日天未だ明けざるに賊兵大挙して將に溝辺に入らんとす蓋し昨日横川に戰ふ所の賊官軍の克つ能はざるを察し夜半兵を潛めて横川と踊の中間無人の地を経て此に出るものあり或は云ふ踊横川両賊軍の合せるものなりと野津大佐これを聞き直ちに兵を出して之に赴く自ら先駆して先づ賊と拒む賊左に折れて間道に入る乃ち餘兵と以て之を要撃す賊また左折す斯の如くすること三たびなり遂に加治木と國府の中間なる本道に出づ野津大佐乃ち全

兵を以て中央を突貫し短兵接戰するに至りて賊の中隊長原四郎兵衛以下數名斃を賊遂に死屍を捨て山田に走る是に於いて三好少將は野崎中佐と共に溝邊より郡山街道に向ひ山口少佐として現兵三中隊を以て加治木より山田に向つて追躡せしめ自ら野津大佐の率る所の中軍三中隊及び踊へ分け遣を処の二中隊を以て海路より鹿兒島に上り途に賊を要擊せんと

を踊の二中隊未だ至らを乃ち護衛兵の二中隊を加治木に留めて輜重彈藥を警護せしめ獨り三中隊を以て鹿兒島に入る山口少佐の加治木より追躡するや直ちに山田の背後なる十三町村に出づ賊既に強半蒲生に入る聞き又進んで久徳村に至り前面の山上に上る時に日已に暮を守備を設けて蒲生の賊と相對を時に吉田に益滿大尉率る処の新選旅團二中隊なりて守

備を始め三好少将重富より鹿兒島に入るや在縣の新選旅團一大隊と分ちて此地に守備せしむる者あり九月一日昧爽賊兵まづ道を轉じて吉田に出でぎ右に折れて左に入る山田少佐乃ち山上の二中隊をして一中隊は右側より下り一中隊は左側より吉田に下り新選旅團と俱に向背より蒲生の殘賊を拂ひ直ちに方向を轉じ吉田街道より涼松に出づ天已に晩るを因て守備を設けて守り翌朝を以て帶迫に入る此日拂曉三好少將野津大佐は近衛兵四百餘人を率ゐて吉野より吉田に向て進む賊は邀へ擊んとして賊避けて吉田より下伊敷村の間道を潛行して冷水に出で突然として城山の上に顯る發砲拔刀して一時に私學校を奪ひ八方に散じて火を放ち人を殺す降伏人まる賊は應じ市民往々賊勢を助く後に知る賊の城山に入るや三好少將

賊城山より顯見八方より火を放つ

出発の後僅こうふ四十分を過ぎぬと此時賊徒そ既に城下に潜入し機と見て通ぜるも図る亟こうらぎと云ふ初め岩村鹿児島縣令ハ日向地方と巡視し八月二十日と以て美々津より宮崎に巡る賊魁の脱逃せるを聞きて晝夜兼行して縣廳に帰る時に在縣の兵ハ新選旅團七百人と巡査其半数海兵若干なるのみ警備足らざる故以て細島に電報し忽ち出兵なりんとと乞ふ

既にして三好少将至り邀へ撃つを大ひに敵と雖ども賊の地理を悉せるに加へふるふ或ひハ至る処耳目多き故以て出没変現定まらず無人の地を衝き城下に入らんとするの警報なり縣令急に人を伊東海軍少将に馳せて地下の警備と托を兵を乞しを以て應ぜず海兵百人を率ゐ来りて綿貫少警視の率る所の巡査及び新選旅團兵と倶に縣廳近傍の米倉に至り米苞を

砲壕を築き喞筒を備へ根據とす是より於て縣令へ公書官金等を船に移し官員の妻孥等を船に避けしむ此時島津久光父子を櫻島に赴く翌朝賊の城山に出るに及び縣令廳上に壁書を遺して賊の暴行を戒め避けて海上に浮む後日に至るまで賊の為めに乱斫せらる伊東少將乃ち米倉に居り其率る所の海兵と新選旅團二中隊を指揮して防禦に海兵は能く戰ふと雖ども其數百名に過ぎず新選旅團は生兵なれども慣れざる因つて遂に旧米倉に入りて死守す賊火を放ちて攻むる倉中喞筒を以て燒くこと能はず對船二日の日中に至る初め賊の乱入するや伊東少將直ちに人を遣して三好少將益満大尉に報ぜしむ益満大尉先づその報を得て其二中隊を以て鹿兒島に帰り且つ人数三好少將の陣に遣る三好少將の鹿兒島に入るを

16
48
54

ハ編と継ぎ巻と換へて読下さべし

明治太平記廿三編巻之二終

版権免許明治十二年十三月三日

定價廿三錢

版権免許

著者 東京府士族 村井静馬
本所區本所竪川二丁目五番地

東京 通壹丁目 大倉孫兵衛
同 北畠茂兵衛
同 二丁目 稲田佐兵衛
同 三丁目 九屋善七
同 長野亀
芝三島町 山中市兵衛
通 油町 水野慶次郎
通 猿籠町 東生亀次郎

発兌 書林 日本橋區日本橋通二丁目十三番地 小林鉄次郎藏板